幻夢抄録―目覚め―

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻夢抄録―目覚め―

【Ｎコード】
Ｎ０７４９Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
どこにでもいる、ごく普通の高校生の、早瀬氷魚。彼女は、立て続けにみる、妙な夢に悩まされていた。そんなある日、氷魚の前に、自分を迎えにきたのだという、謎の少年が現れて！？異世界を舞台にくり広げられる、壮大スペクタクル。

プロローグ～白昼夢～

プロローグ

闇、だった。

その闇の中、水音によく似た音が響く。

オネガイ、ワタシヲヨバナイデ！アナタハ、ダレ？ワタシヲヨバナイデ　　メザメナンテ、ノゾンデイナイノニ！！　　樹々を伝う、赤い雨。

あれは、なに？　　ムカエニ、イクカラネ…

おかしな夢をみた。

凍えそうなほどに、寒く真っ白で、もしかしたら、雪だったのかも知れない。

その中、自分は、血に濡れながら泣いていた『メザメルノハ、イヤダ』と。

それは、妙に生々しく、はっきりと明瞭に思い出すことができた。

（なん、だったんだろう？）　　ベッドに座ったまま、呆けていた彼女を、母親の怒号が殴った。

「ちょっと、なにボケッとしてるの！？学校遅刻するわよっ」

「あぁ…はぁい！今下行くぅっ」

ベッドから、立ちあがったその時、枕元の目覚まし時計が床に落下し、アラームが鳴り響いた。

「あぁ、もう、うるさいなぁ…どうして今頃鳴るんだか」

制服に着がえ、着がえのために閉めてあった、薄藍色のカーテンを開ける、夏の、曇ひとつなく、青く晴れた空が、目に痛かった。

「今、夏…だよね？なんだったんだろ、ま、いっか、朝ごはん食べ～よ」古びた階段を軋ませながら、彼女は降りていった。

「おはよーう」
台所の暖簾をくぐり、椅子に座る。
「ほら、早く食べなさい、遅刻するわよ？」
目の前に、ベーコンエッグとトーストが出される。彼女はトーストを頬張りながら言った
「はいはい、だーい丈夫だって。いただきまーす」
「あなた、最近、顔色が悪いようだけど、ちゃんと寝てるの？」
彼女は、質問には答えず、トーストを咥えたまま、廊下をせわしなく右往左往する
「お母さんっそんなの、話してる暇ないんだって！」
毎朝の光景に、彼女の母親は、溜め息をついた。
「忘れ物は？お弁当持った？」
「ないないっ、行ってきまぁーす！」
玄関のドアが、勢いよく閉まる音を遠くに聞いて、彼女は走り出した。
あたし、早瀬氷魚（はやせひお）市内の高校に通う、普通の高校生だけど、最近、どうも夢見が悪くて、寝不足気味なんだ。
っといけないっ、遅刻だーっ！氷魚は、三回目の予鈴を遠くに聞いて、言葉どおりに飛びはねた。

1章：白昼夢

校内に、予鈴が木霊する。
氷魚は、息も絶えだえに、机に突っ伏していた。
「セ…セーフ」
「ひーちゃんてば、今日は自習って言ってたでしょー？聞いてた？」
死にかけている氷魚を、後ろの席の友人がからかった。
「たぶん寝てたわ…」
と氷魚。
「うん、分かる…担任の授業って、眠くなるよねぇ」
「なるなる」
「ヒマだよねぇ…課題めんどくせー」

「だよねー…ふあぁ」
氷魚は、欠伸を噛み殺しきれず、大欠伸した。
「なした、寝不足？」
「そうなんだ、最近…ヘンなんよ」
「ヘンて、悩みごと？親とか？」
「ううん、夢を見るの…」
「夢、どんな？」
「言っても、笑わない？」
「笑わない笑わない」
「ホントかなぁ」
「話してよ、気になるじゃない」
「うん、何かね…夢の中で、なぜかまわりが真っ白で、寒くて…もしかしたら、雪だったのかも知れないけど、あたし…血まみれで泣いてるんだ？」
「う～ん、血まみれかぁ。疲れてんだよ、きっと。休めばよくなるさ、元気だしな！」
「そ、そうだよね？サンキュー」そう言うと、氷魚はもう一度欠伸をして、机に顔を伏せてしまった。
「こりゃ、相当ひどいね…可哀想だし、ほっとこうっと」

初夏の、生ぬるい風が、氷魚の髪をそっと撫でた。
擽ったさに目を覚ました彼女は、二、三回瞬きをする。
放課後の教室には、静寂が満ちていた。
「あれ、あたし…寝てた？もう、それにしても、起こしてくれればいいのにさ。仕方ない、一人で帰るか」
（ホントに、誰もいない、おかしーなぁ…そんなに、遅い時間じゃないのにねぇ）
靴箱をしめ、氷魚は、外へ歩きだした。
（やっぱりヘンだ、何かが、おかしい）
いつも賑やかな商店街、しかし今は、死に絶えたかの様に静まりかえって

いる。氷魚は、大通りに出、携帯で自宅に電話をかけた。
「あれ、やだ、ちょっと…どうして！？繋がんない？」
氷魚の背中を、一筋、いやな汗が伝う。
（どうしたんだろう、もしかしたら…何かあったのかも！）携帯を閉じる氷魚、通り抜けていく風の音が、いやに、大きく聞こえた。
（とっ、とりあえず、家に急がなくちゃ！なにか、あったのかもしれないっ）氷魚は、走り出した。
橋を渡り、砂利道を走り抜け…しかし、そこにあるはずの、自宅はなく、茶色い土を剥き出しにした、ただ広い敷地が広がっていた。
「ウソ…なんで、何でウチがないの！？いったい、なにがっ」
背中に、強い衝撃を感じて、氷魚は、怪訝そうにふり向いた。
「石…じゃなかった、なに、祠？何で、ウチの敷地にこんなのがあるんだろ」
その時、どこからともなく、男の笑い声がする、もう、可笑しくて仕方がない、といった風の声だ。
「ねえ！誰かいるの？！」
氷魚は、せわしなく周囲を見まわす。が、しかし。くつくつ、と笑い声はやまない。
「ねぇってばっ！」
血が上って、怒鳴り散らした彼女に、やっと気がついたように、声が、答えた。
「あ、あぁ…すまない。気を悪くしないでくれ」
「どこにいるの！？」
きょろきょろと、見まわす氷魚。
「すぐ傍にいるぞ？氷魚、お前の足元にね」
「え…黒猫、どこから…」
黒猫は、氷魚を見上げて一声鳴くと、笑い始めた。
「迎えにきたよ、氷魚。あぁ可笑しい、おまえの、あの時の顔ときたら、腹が捩れるかとおもったよ」
「ね、ね、ネコが喋ったぁっ？！」

氷魚は、後ずさった。
「やっぱり、この姿はマズかったか…これが気にくわんなら、何にでもなるぜ？」
猫は、祠に飛びあがると、黒いノースリーブに、ジーンズを着た男にかわっていた。
「あんた、一体！？」
おそるおそる、氷魚は男の方に近づく。
「お前を迎えにきた、それはさっき言ったな？」
いきなりペースがずれ、氷魚は瞠目した。
「いや、そうじゃなくて…」
「あぁ…自己紹介してないのか。俺は、瑪瑙（めのう）だ、ヨロシク」
「あ…あたしを迎えにって、どうゆうこと？」
（何なんだ、こいつ…いきなりペースがずれたし）
「なにも覚えてない、か。まぁ、仕方ないよな、小さかったし」
「え？」
（ますます分かんないっ、なに？こいつ）
「えーっとな、つまり、あんたは、人間として育ってきたが、それが、全部嘘だってことさ」
「え、なに？なに言ってンのか、さっぱり意味分かんないんだけど？」
「お前は人じゃねえって事」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0749a/

幻夢抄録―目覚め―

2010年10月28日08時09分発行